

ヘーゲル哲学における無限性の概念の考察

相良, 謙一

<https://doi.org/10.15017/1397649>

出版情報 : 哲学論文集. 16, pp.81-100, 1980-09-20. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

ヘーゲル哲学における無限性の概念の考察

相 良 謙 一

序文

拙論の狙いは、『精神現象学』「力と悟性」の章に即して、対象意識の自己意識への移行、並びに「生の単純な本質」としての「無限性」(Unendlichkeit)の「概念」の生成を見届けることである。「力と悟性」の章においては、対象世界の構造と意識の構造との同一性が開示される。これをもし例えば「先験的哲学」の言葉に翻訳してみるならば、経験の可能性の制約は同時に経験の対象の可能性の制約である、ということになるだろう。しかしながら、ヘーゲルの狙いはもっと深いところにある。ヘーゲルは先験的反省の論理を越えて、思弁的反省の論理を展開する。意識と対象の同一性は無限性と呼ぶことができるが、しかしこの同一性は、自体的背後世界から切り離された感覚的現象世界のレベルにおいてではなく、むしろ現象と自体的内的連関(ヘーゲルはこれを内的自体的区別と呼ぶ)のレベルにおいて成立する。言いかえると、無限性の概念は、本来、自然科学の対象世界を越えた生の形而上学的世界の構造原理として明らかにされるのである。

ヘーゲルは悟性の啓蒙主義的風潮を極度に嫌う。悟性は形而上学的対象が夢想の産物であり、認識不可能なものであるこ

とを裏証し、これを学問の支配領域から切り離そうとするからである。しかしながら、ヘーゲルはかかる学問のあり方に真っ向から反対し、悟性を超越するものを論理即ち概念の言葉によって言い表わすべきであることを提唱する。従って、ヘーゲルにおいては、思惟と認識はもはや区別されない。悟性が無制約者を認識しえないのは、悟性が有限だからであるが、ヘーゲルはそこから直ちに無制約者が認識不可能であるという結論は降さない。むしろ悟性の有限性を踏まえた上で、悟性自身の自己了解を促し、悟性に対して（自覚的に）悟性の新たな次元を開拓すること、つまり、悟性的反省の閉ざされた体系を反省そのもの（哲学的反省或いは理性としての反省とも呼ばれる）⁽¹⁾によって解体し克服することが、ヘーゲルにとっての問題なのである。

青年期のヘーゲルの思索は常に、純粋な生を思惟することに向けられていた。その時、彼が模索していたのは、有限者と無限者（人間と神）との生きた具体的な関係、即ち、「有限者を無限者のうちに生として定立すること」⁽²⁾であった。彼にとつて、生は純粹悟性概念の抽象的統一や伝統的論理学の類概念とは異なって、有限で特殊なものの存立を許し、これを自身自身の形態（生あるものども）として自分のうちに包括する統一的一者であり、まさにその意味で「無限」と言っているのであった。だが同時に、ヘーゲルは生における有限者から無限者への高揚、或いは無限者から有限者への下降を概念の言葉によって言い表わす努力を忘れない。まさにこの努力の成果が、一般に弁証法と呼ばれているものの内実であり、ヘーゲルの思弁の内実なのである。⁽³⁾

今回の論稿においては、我々はとりあえず、『精神現象学』「力と悟性」の章に即して、悟性的認識の枠組がいかにして破られ乗り越えられていくのか、また無限性の概念の弁証法的思弁性が一体いかなる位相において確立されるのかを見ていくことにしよう。

I 「感覺的確信」「知覚」の概略

「感覺的確信」の章は直接性の批判であり、言語を越えて存在すると言われる一切のものの批判である。感覺的意識は、自分の言表に先立って無媒介に存在するこのもの (Dieses) をもって真なるものと私念 (Meinen) する。だが、「言表されないと言われるようなものは、真ならざるもの、非理性的なもの、単に私念されたものに他ならない」。⁽⁴⁾ 感覺的意識の私念や意識を切り崩すものは言語である。「言語は私念を即座に逆転させて別のものとなし、私念に何も言わせない神的本性を持っている」。⁽⁵⁾ 意識は言語の神的本性を通して、このものが実は否定と媒介を孕んだ普遍的なこのものであること、他方また、感覺や私念に訴えるこの私も実は他のこの私によって否定され媒介された普遍的な私であることを経験する。こうして意識は、普遍的な私が普遍的なこのものを真理として受け取る知覚 (wahrnehmen) の段階へと進む。

「知覚」の章は、物を確固とした実体と思いなす健全人間悟性 (常識) の批判であり、經驗的命題における主語述語構造或いは実体と属性の關係の批判である。⁽⁶⁾ 知覚の対象である物 (Ding) は、もはや私念された個物ではなく、他の個物に対しても妥当する普遍的諸性質をもった普遍的な個物であり、感覺的所与と思维規定の混合的統一態である。ヘーゲル流に言えば、物とは、諸性質 (自由物質) を己れのうちに無雑作に受容する「抽象的普遍的媒体」或いは「もまた」(Auch) の契機と、諸性質相互間並びに諸個物相互間の連続性を拒否する「排除的一者」(Eins) の契機の統一態である。従って物は、二重の相違せる存在者であることになるが、しかしあくまで、このように互いに対立する両契機のただ一つの統一においてのみ (in einer Einheit) ⁽⁷⁾、己れの存在と真理を保有しているのである。

ところで、常識は対象 (多数の性質をもった物) を予め既に構成されている所与として純粹に捕捉する態度をとり、対象構成の起源を問うことはない。常識は対象の存在を直接的に信憑しており、対象に自分の反省作用が加わることを執拗に拒否する。常識にとって真理の規準は対象の自己白同性・無矛盾性なのである。

成程、常識は知覚判断に際して錯覚や誤謬の可能性があること、主語と述語の結合が主観的偶然的結合でありうることを認める。その限りでは、常識の反省作用（主観的経験的反省）は知覚経験にとって本質的である。だが、誤謬の起源と責任は、真なるものを真なるものとして純粹に捕捉しなかつた常識の側に帰せられる。従つて、常識は自分が誤謬に陥つてゐることを反省するや、再び経験に立ち返り、物を純粹に知覚し直そうと努める。

しかしながら、常識はかかる外的経験的反省を介しても物の真理を把握することはできない。物は本来、常識をして個別性と普遍性（一と多）の面契機をア・プリオリに総合するように駆り立てる力を持っているからである。ところが、常識は物の実体性を信じて疑わず、なおかつ実際には物の本性（矛盾）によって蒙っている圧力を自分の反省作用の所為だと決め込んで、諸々の詭弁を弄することによって物の孕む矛盾を撤回しようとする。即ち、常識は一方において、物を一者として定立しつつ、感官を通して性質（自由物質）を受容する普遍的媒体としての自分の側に性質の数多性の契機を帰属させながら、他方において、物を性質の数多性として定立しつつ、「限りにおいて」（Insotern）の論法を導入することで性質の数多性を帰一化（Ineinsetzen）する自分の側に一者の契機を帰属させもするのである。⁸⁾

だがしかし、常識の弄する詭弁は、逆に物の矛盾性を常識に対して認識させる。常識は上の二つの事態を比較することによって、自分が純粹捕捉と自己内反省の二つの態度を取つてゐることを見出すだけでなく、同時に、自己自同的実体としての物自身が二重の仕方で現象していることを見出すからである。物は物を捕捉する意識に対して一定の仕方で見られるが、しかし同時に、今現われるその仕方から出て自分のうちに還歸してもいる。物は二重の存在様態の内的なただ一つの統一としてのみ真理なのである。

こうして物は己れの本性によって己れの実体性を解体し、もはや物に制約されぬ無制約的普遍性（物の内なるもの）の地平を開示する。しかし、知覚の結果である無制約的普遍者は、単に物の真理を示すだけではない。意識の弄する詭弁によって、物の自己内反省と同時に意識の自己内反省も知覚経験にとって本質的であることが明確になつたからである。「従つて

今や、以前には対象と意識とに割り当てられていた運動の全体が、意識にとって対象そのものとなる。⁹⁾この新たな対象は意識と物との内的な関係それ自身であり、物の存立を可能ならしめる「物の内なるもの」である。「我々にとっては、新たな対象は意識の運動によって生成したのであるから、意識自身がこの対象の生成のなかにくみ込まれており、(意識と物の)両側面における反省は同一にして唯一の反省である。¹⁰⁾知覚の最初に登場した事柄そのものに外的で経験的な反省と対比して言えば、この唯一の反省は事柄そのもの内なるものに迫まる先験的な反省である。かくして此処に、事物世界の構造が実は同時に意識の構造であることが自体的に明らかにされて、意識は「悟性の王国」へと進みゆく。物を知ることとは意識の先験的な自己内反省によってのみ可能なのである。

II 力の概念

物は内容的には排除的一者と普遍的媒体、形式的には対自存在と对他存在といった相対立する両契機の内的統一態である。「物は同一の観点において自分自身の正反対である。对他的である限りにおいて対自的であり、対自的である限りにおいて对他的である。」¹¹⁾ところで、物における対自と对他の両契機のかかる相互移行は、物の内なるものとしての力(Kraft)の運動である。つまり、知覚の結果を整理する「我々考察者」(Wir)によって、先の对他存在の契機は「力の外化」として、対自存在の契機は「力の外化から自分のうちに押し戻された本来的な力」として捉え直され、なおかつ此処に、相反する両方の必然的な相互移行運動、即ち両力のただ一つの統一である「全体的な力」の運動が看取されているのである。

従って、物の内なるものとしての力は、力の両契機の区別化の側面と統一化の側面を持っているが、しかしこの両側面を区別化した統一化するものは、此処ではまだ「我々考察者」の思想や概念のうえでのことである。それ故我々は、力を力の思想や概念から一旦解放し、力の現実性を考察してみなければならない。

力の現実性を考察する時、力は、相互に対立しあいながらも各自自立的な存立を保ついわば実体化された (substantiiert) 両極の運動として定立される。ところで、力をこのように実体的な両極間の運動として捉える時、まず差し当たっては、因果性の関係 (Kausalitäts-Verhältnis) に従って、両極の一方 (対自存在・本来的な力) は他方を誘発する能動者として規定され、他の極 (対他存在・力の外化) は前者によって誘発される受動者として規定される。しかし、誘発される対他存在の極は単なる他者ではなく、他なる力であり、この力も同様に、対自存在の極に対してこの極が対自的に存在するように誘発し作用している。つまり、対自存在の極が対他存在の極を対他存在へと誘発するのは、誘発される対他存在の極が、対自存在の極をして誘発するものであるように誘発してのことなのである。このように、両力は互いに他の力を前提し、各自の与えられた規定を相互に交換しあう。従って、原因と結果の直線的な運動は自己のうちに曲折し還帰する。力とは本来、相互作用 (Wechselwirkung) のことであるが、まさにこのように両力の相互作用として発現し作用する当のものをこそ、全体的な力に他ならないのである。

力は力の概念や思想から解放されることによって、二つの実体的な力に分割される。だが、両力は相互に規定を交換しあつて、全体的な力の統一性へと帰一化する。従って、両力の存立はあくまで「表面的な消失する契機」であり、「遊戯」(Spiel) の如きものである。しかしながら、両力の遊戯は力の本性上不可欠である。全体的な力はそれ自身安らいで存立しているのではなく、両力へと分裂し、両力の相互作用として発現・作用する限りでのみ、現実的 (wirklich) な力だからである。つまり、全体的な力の統一性はその本性に従って必然的に、自立的に存立する両極に対して「媒語」として「現象」し、他方また、両極も相互移行運動として己れの存立を全体的な力の不可分の統一性において確保しているのである。力が物の内的本質であるのはまさにこの点においてであるが、それが故に、力における区別と統一のかかる相互転換運動は、「区別でない区別」「内的自体的区別」としての「無限性」の萌芽を示しているのである。

以上のようにして、先には我々によって定立されたにすぎなかった力の概念は、今や力そのものに即してその実在性を証

示するに至った。¹² 力の概念はもはや空虚な概念ではなく、客観的に妥当する概念、即ち概念としての概念 (Begriff als Begriff) である。「力は物の内なるものであるが、それは内なるものが概念としての概念と同一である限りにおいてのことである。」¹³ かくして此処に、我々によって或いは自体的な仕方、物の内なるものが実は概念としての概念であることが明らかにされた。悟性はこの事態をいかにして経験してゆくのであろうか。

III 力と悟性

悟性の対象はもはや個々の事物存在ではない。物はその直接存在を否定して自己のうちへと還帰 (反省) したが、この自己こそは存在の真理・真実の存在であり、物の内なるものである。従って、物の直接存在は此処では否定された存在・非存在である存在として仮象 (Schein) という意味しか持たない。物の内なるものは「超感覺的な真なる世界」「常住する彼岸」と術語化され、これに対して物の直接存在は「感覺的な現象する世界」「消失する此岸」と術語化されるが、物の内なるものは物の真なる背後とも呼ばれるように、いわば現象の帳りの背後に現象を越えた超感覺的な本質世界が開けているわけである。¹⁴

ところで、悟性は超感覺的なものの開けに気づいてはいるが、その何であるか (概念としての概念) をまだ知らない。悟性は差し当たって、現象 (両力の遊戯) という媒語を介して内なるものを垣間見るにすぎないのである。確かに此処には既に、「物の内なるものと悟性をその両極として持ち、現象をその媒語として持つところの推理的構造 (Schluss)」¹⁵ が自体的には成立している。だが、悟性は推理における三つの項を外的区別項として捉える。内なるものは悟性の外に存在する一つの極と見られ、また現象の彼岸 (現象しないもの) と見られているからである。

無論、悟性も自分なりに、三つの項を連結しようと努める。「力の法則」の定立はその最初の試みである。具体的に言え

ば、悟性は交替変化する力の現象を思惟（悟性の内なるもの）のエLEMENTにおいて捉え直し、これを数学的に公式化して力の法則として定立するのである。¹⁰⁶この場合、力の法則は定めなき現象を思想のうちに直接的静的に反映・模写したもの（Abbild）であるから、力の区別項もまた「絶対に普遍的な静止した自己自同的区別」¹⁰⁷として力の法則のうちに直接的静的に取り入れられている。従って、超感覺的世界はまず最初に「諸法則の静かな国」として現われる。

しかし、諸法則の静かな国は悟性の最初の真理ではあっても究極の真理ではなく、「最初の超感覺的世界」。「理性の不完全な現象」¹⁰⁸であるにすぎない。何故なら、力の法則は力の区別項を静的没交渉の区別項として具えるだけの静的法則であり、力を量に還元してしまっているが、これでは力のダイナミックな相互轉換運動の意義は十分に捉えられないからである。

ヘーゲルは此処で自分独自の力、即ち力の概念としての概念を尺度にして、自然科学的な力の法則を批判している。力の法則は区別項の自立性或いは没交渉性の側面と区別項の静的な統一の側面を併せ持つが、前者は両力の遊戯の側面に、後者は全体的な力の統一性の側面に対応させられている。つまり、力の遊戯と全体的な力の間の問題が此処では力の法則のうちで原理的に再現されているのである。ところが、力の法則は区別項を没交渉的に存続させ、区別項の関係を量の関係に還元して抽象的の公式において表現するだけである。それ故、力の法則においては、力の統一性と区別性の両契機の動的関係、即ち力のダイナミズムは失われてしまっている。力の概念と力の法則との間には本質的なずれがあるのである。¹⁰⁹

従って悟性は、法則における固定的区別項を流動化して、法則そのもの（悟性の内なるもの）のうちで再度内的に統一づけなければならぬ。法則における区別と統一の両契機の動的関係（内的自体的区別）は、法則の内的必然性とも呼ばれるが、今後考察されるべきはかかる関係の必然性（無限性）なのである。そして関係の必然性が明らかにされることによって、世界の全的構造が剔抉されると同時に、先には悟性と内なるものの両極を外的に媒介すると考えられた感覺的現象の帳りは取り去られ、¹²⁰内なるものが内なるものを観る（Schauen）という事態が、即ち自己意識のエLEMENTが開けてくることになる。ヘーゲル哲学において、意識と対象の同一性は自己意識（観る内なるもの）と生（観られる内なるもの）の同一性をそ

の本来的なエレメントとするものなのである。

IV 無限性

内的な力と外化した力は各自の与えられた規定を直ちに喪失して他者となり、相互轉換的な統一を形成している。ヘーゲルは此処に、「両力の遊戯として現象する全体的な力の存在を見る。つまり此処では、超感覺的世界は全体的な力の世界を、現象は両力の遊戯の世界を意味するが、これは現象と超感覺的世界という所謂二世界論的な世界把握の構造を破壊するためにヘーゲルが設定した装置である。既に明らかのように、全体的な力は両力の遊戯として現象し、また、遊戯における力の区別項は相互に規定を交換しあって全体的な力の統一へと還帰する。このように、超感覺的世界と現象（全体的な力とその遊戯）は、もはや悟性の考えるような二つの世界・二つの実体的なエレメントではなく、相互に深く媒介しあい、他者を制約しあっており、相即不離である。ヘーゲルはこの不可分的統一を真の超感覺的なものと考ええる。

無論、現象と超感覺的世界は区別される。しかし、「区別があっても同語反復的であり、区別であって区別ではない」⁽²¹⁾ 両者の不可分的統一が両者の真の根拠なのである。といっても、この根拠は決して静的な自己自同の実体ではない。真の超感覺的なもの・無制約的普遍者は、現象と自体の区別を内的自体的に孕み、かつまた己れが孕む区別を自ら顕在化し、区別項の対立化を惹起しつつ自己を自己と関係づけている。それ故、真の超感覺的なものが孕む対立は自己内対立（Entgegensetzung in sich selbst）⁽²²⁾、自己の必然的な契機としての対立である。ヘーゲルは、対立として現象し己れを顕わならしめる超感覺的なものを「現象」と呼びもするが、此処に彼が「転倒」（Verkehrung）と術語化する事態の秘密を解く鍵がある。⁽²⁴⁾ 真の超感覺的なものにとって、現象と自体の対立は仮象、それも必然的な仮象なのである。

ヘーゲルは真の超感覺的世界に転倒された世界（die verkehrte Welt）⁽²³⁾ という奇妙で些か挑発的な呼び名を与えている。

最初の超感覺的世界も、知覺世界の直接的靜的模像である以上、知覺世界の転倒と言いうるのだが、これは「交替と變化の原理」²⁶を欠いた靜的な超感覺的世界であり、「表象された世界」²⁷であつた。しかし、眞の超感覺的世界はこの最初の超感覺的世界の転倒された世界であり、己れのうちに動性を孕み、交替と變化の原理を具えた転倒世界なのである。当然のことながら、転倒世界が具えるこの原理は、生滅する感覺的現象が具える原理と同一ではない。²⁸むしろこの原理は、眞の超感覺的なものが、己れのうちに孕む區別を自ら顕在化させ現象させながら、區別を統一化するという意味での交替と變化の原理なのである。この原理こそ実に世界全体を支配し構造づけるところの無限性という絶対概念・論理そのものに他ならない。

「転倒世界としての超感覺的世界は同時に別の世界を越えて包み、それ自身においてこの別の世界である。この超感覺的世界はそれ自身転倒世界であり、即ち自分自身の転倒である。超感覺的世界が自分自身であるのと反対の世界であるのとは、ただ一つの統一においてのことなのである。かくしてのみ超感覺的世界は内的區別或いは自体的區別としての區別であり、言いかえると、世界は無限性としてあるのである」²⁹。

無限性は生の單純な本質或いは世界の魂と言われるように、無限性が支配する世界は生の世界である。常識は知覺世界をそれ自身で実在的な現実だと思念するが、しかしこれはそれ自身では何等現実ではなく、またかかる現実に対置される超感覺的世界もそれ自身では何等現実ではない。眞の現実とは無限性が支配する生の現実であり、現象と自体の區別を越えて包む無限の生の現実である。「ヘーゲルが言うように、哲学の固有な対象は現実 (Wirklichkeit) であり、本質と仮象との具体的な統一を示す『論理学』のカテゴリーなのである」³⁰。

悟性は自分自身のうちに、固定的な或いは確固とした思惟の枠組(感性のア・プリオリな直觀形式と悟性のア・プリオリな思惟形式)を持つているが、内容の方は感官を通して与えられる。しかしながら、無限の生は内容と形式との合成 (Zusammen-setzen) では決してない。認識主観と対象といった図式は生の把握にとっては無効なのである。悟性自身、自分の認識に範圍と限界があることを自覺している。つまり悟性は、無制約的普遍者は認識不可能であり、認識しようとすればアンチ

ノミニーに陥らざるをえぬ以上、自分が認識しうるのは感覚的現象のみであると結論する。此処に、現象と諸法則の静かな園といった悟性流の図式が存立を持つが、無制約者はいくまでこの図式の外部に、即ち現象と悟性の彼岸に残存させられている。しかしヘーゲルによれば、このように不可知的なものとして残される自体的背後世界それ自身のあり方が「仮象」なのである。

従って、無制約者を認識し、生世界の魂としての無限性を確立するためには、悟性の孤立的反省 (die isolierte Reflexion) に自己破壊の法則 (das Gesetz der Selbstzerstörung) を与えて、悟性の固定的な思惟の枠組を打破し、無限の生の自己内対立・矛盾が思惟されねばならない。「形式的悟性とは異なって、学的認識はむしろ対象の生命に身を委ねること、即ち対象の内的必然性を目の前に見据え、これを言い表わすことを要求しているのである」⁸³

無限性の概念は次のようなかたちで純化され、論理として確立される。真の無制約的普遍者は、己れのうちに区別を孕みながらも区別されない自己自同者である。しかし、この自己自同者は己れが孕む区別を顕在化し、区別や対立として現象する。換言すれば、自己自同者は自分の同一性を否定し、自分を二重化 (Entzweien) する。従って、無制約者の自己自同性 (Sichselbstgleichheit) 或いは自己関係 (Beziehen sich auf sich selbst) は、自分自身の反対であり転倒である。自分が自分と等しいこと、自分が自分と関係することは、自分の二重化によって成立することだからである。それ故、自己自同者にかかる自己関係を思惟しうるためには、関係の各項と関係それ自身との関係が内的な関係として思惟されねばならない。自己関係はそれ自身自己内対立を孕んで成立しているのである。

ところで、二重化されたものは互いに他者の反対であるが、しかし両項は自分自身において自分の反対であり、自分の与えられた規定を直ちに喪失して他者となる。従って、分裂の両項は各自の規定を交換しあう相互転換的な統一を形成している。本来、対立項は各自他の項との関係においてのみ存立しうるものであり、対立項が対立項であるためには、対立そのものを可能ならしめる対立項の全体 (総合) が既に存在していなければならない。さもなくば、対立はもはや対立ではなく、

対立の各項は没交渉的で自立的な一つの存在者であるにすぎない。対立を対立として思惟しうるためには、対立の各項の關係、並びに対立項と対立それ自身との關係が内的自体的な対立として思惟されねばならないのである。

真の自己自同者は自己の同一性を否定し分裂化することによって、分裂項の対立化を惹起しつつ自己を自己と關係づけている。つまり、真の自己自同者は同一性の分裂化の側面と分裂の統一化の側面の自己内対立を、肯定的に言えば、ただ一つの統一を形成している。従って、真の自己自同者は、「反省の形式において表現するならば、区別と非区別の統一・同一性と非同一次性の同一性」³⁴である。実にこのような構造をもつ自己自同者こそ、真の具体的な統一であり、自己 (das Selbst) なのである。

これに反して、ヘーゲルが指摘するように、「統一から区別が生ずることはありえないと言われるのが常である」³⁵直観主義者が定立する自己自同者、例えばシェリングの無差別的同一者は、区別や対立を自分から排除し、自分の傍らでそのままの形で存続させる静的な無制約者である。しかし、こういった無制約者は悪しき無限者であり、真の無制約者ではない。何故なら、無差別的統一は区別の存立を捨象した抽象的な統一であり、実は区別に対立し、区別から区別されて存在する一つの区別項・一つの対立項であるにすぎず、従って区別の存立によって逆に制約された無制約者・有限な無限者だからである。悟性の孤立的反省は自己自同者の内的自体的区別を外的区別に貶めるが、知的直観も区別や対立を捨象することによって無制約者を一気に捉えようとする限り、外的区別の域を越えるものではない。無制約者の自己内対立・矛盾を思惟することが問題なのである。「哲学の課題は分裂を絶対者のうちに絶対者の現象として、有限なものを無限なものの中に生として定立することにある」³⁶。

V 今後への展望

対象世界は無限性の論理によって構造づけられる生の世界であること、また、生の世界を自己の対象とする意識は自己意識であることが、「力と悟性」の章の結末において明らかにされた。これに続く「自己意識」の章において、無限性は自己意識（人間）を真に生かし存在させしめる論理として開示される。筆者の本来の狙いも、「自己意識」の章の叙述を考慮に入れながら、無限性を生と自己意識の根源性として捉え直してみることであった。従って筆者にとって、これまでの考察は本来的課題を解くための序論にすぎない。与えられた紙幅を予備作業に費した今、結語にかえて、今後への展望を可能なかぎり切り開いておくことは、筆者自身にとっての急務である。

「自己意識」の章は人間の生ける様を実に具体的に描写している。⁸⁷しかしながら、「不幸な意識」の登場において明らかのように、ヘーゲルの問題は人間の具体的な生ける様を赤裸々に描くことではなかった。むしろ、人間の生をその根底において真に具体的な生たらしめているものは何であるのか、換言すれば、生についての我々人間の人間知(Menschenkenntnis)の次元を突き破って、人間的自己意識の自己性、或いは自己認識(Selbsterkenntnis)が問題であった。⁸⁸従って、生と自己意識の関係はある種の緊張関係において成立しているように筆者には思われる。しかし、筆者のこの思いを実証するために、生の無限性の問題と人間的自己意識の自知(Selbstbewusstsein)の問題とがいかなる思想的連関において捉えられているかが明確にされねばならない。

まず、生を考察することから始めよう。「自己意識」の章において、生は次のようなものとして描かれている。無限にして一なる生は生の形態或いは分枝としての多様な生あるものどもを産出する。従って無限の生の統一は、自立的諸形態へと分裂化する「絶対に否定的な、言いかえると無限な統一」⁸⁹である。ところで、多様な生あるものどもは、自立的形態

として、各自生の他の形態を非有機的自然とみなし、これを食い尽くすことによって己れの存立を維持する。つまり、生あるものどもは、実体としての生の直接的な連続性を拒否し、むしろ生を己れの生存のための手段とみなす。しかしながら、各自立的に振舞う生あるものどもの総てに貫流し脈打ちながら、これら総てを自己のうちに還帰せしめ、一つの有機的統一態として組織化しているものこそ、無限の生の力である。欲求において生あるものどもは互いに手段でもあれば、また目的でもあるが、無限の生は分肢間のかかる手段—目的関係の只中にその媒語として現象する統一的一者なのである。生の単純な本質としての無限性が、「到る処に遍在し、いかなる区別によってもその流れを妨げられ、中断されることのない普遍的血液」と呼ばれる理由も此処にある。

だがしかし、このような仕方で見られる生の概念は、「動物的な有機体」(der tierische Organismus)を我々に想い起させる要素を持っている。生の概念と無限性の概念は本来同値なのであるが、少なくとも「自己意識」の章の最初に展開される生の概念はまだ低次の段階にとどまり、理念ではあっても直接的な理念であって、絶対的な理念とは呼びえないであろう。ヘーゲルは、生が直接的な或いは即自的な類であるのに対し、自己意識は自覚的に類(für sich selbst Gattung)であると言う。⁴²

「自己意識は区別が無限な統一であることを自覚している統一であるが、生はこの統一そのものにすぎず、同時にこの統一を自分では自覚していない。」⁴³「生は自分とは違った他者を、即ち生がこのような統一或いは類であることを自覚している意識を指示する。」⁴⁴

ヘーゲルはこのように、生と自己意識の関係を即自—対自の関係として捉えている。しかし、翻って考えてみるに、生の即自性から解放され、生が類であることを自覚する自己意識は、生の類性を一体いかなる位相において、またいかなるものとして自覚しているのだろうか。もし生が即自的な統一或いは直接的な理念にとどまり、動物的有機体の影をもつものであるならば、そのような生を捉える意識は実は理念の亡骸を、或いはせいぜい、理念の模造品を捉えているにすぎず、従って生の無限性を真に概念把握する自己意識とは言いえないであろう。「生の理念が直接的であるということは、つまり、概念が

概念としては生のなかに顕現していないということなのである。⁴⁵⁾

確かに、概念が概念として生の只中から顕現してくるのは、自覚的な類としての自己意識においてである。だが、自己意識が自覚するところの生は、ヘーゲルの主張に異議を唱えることになるにしても、直接的な理念ではなく、それ自身絶対的な理念でなければならぬ。生と自己意識の関係は、即自性から対自性への移行或いは自然的な生から精神的な生への移行といった図式によっては絶対に説明されえないのである。⁴⁶⁾ この点を見失い、生の無限性を無雑作に処理する時、我々は生と自己意識の根源的な緊張関係を自らの手で被い隠し、ひいてはヘーゲル哲学の核心を被い隠すことになるであろう。

本来、「力と悟性」の章の結末においては、悟性と内なるものを外的に媒介する感覚的現象の帳りは取り去られ、内なるものが内なるものを観る (Schauen) という事態が成立していた。観るものは自己意識であり、観られるものは生である。だが、観ることの構造、即ち生と自己意識の関係は、認識論的な主客対立の構造でもなければ、また先の即自―対自の構造でもない。むしろ観ることの構造は、ヘーゲルによって、「自己意識が己れの他者であることにおいて己れ自身を知る」 (Bewußtsein seiner selbst in seinem Anderssein) と呼ばれるところの構造、即ち「無限性」の構造を形成している。つまり、自己意識が観るところの内なるものは、もはや単なる自然科学的对象 (Gegenstand) としての生でも、また即自的な類としての生でもなく、自己意識自身の姿としての生である。言いかえると、観られるものとしての生は実は自己意識にとつて自己意識自身の姿を映し出す鏡の如きものなのである。では、そのような鏡としての生は果してどういったものなのであろうか。生の根源的な意味を闡明化するためには、我々はヘーゲルの青年期の著作 (所謂初期神学論集) を繕いてみなければならぬ。既に述べたように、宗教と哲学 (表象と概念) の間を動揺しながらも、青年期のヘーゲルが常に模索していたのは、有限者と無限者、或いは可変者と不変者 (人間と神) との生きた具体的な関係、即ち両者の和解であり、有限者を無限者のうちに生として定立することであった。ヘーゲルは言う。「純粋な生を思惟すること、それが課題である。…… (中略) …… 純粋な生を知ること、人間とは何であるかを知ることであろう⁴⁷⁾」と。生を知ることと人間を知ることが直接的に結びつ

けられていることの疑問は、最初の草稿において、純粹な生が純粹な自己意識と書かれていたことに、その解明の糸口を見出すことができる。純粹な生とは、人間と神を媒介し和解 (ver-söhnen) をせる神の子 (Sohn) としてのキリスト、即ち、人間的自己意識の眞の自己を意味している。つまり、人間にとって、この純粹な生は自分自身を映し出す鏡であり、自己意識の姿そのものなのである。⁴⁸ かかる意味において、「我々は無限の生を精神と呼ぶことができる。」⁴⁹ 純粹な生はそれ自身自己意識であり、無限性の概念そのものの顕現だからである。だからこそ、イッポリトは次のように言うことができたのである。

「もはや有限者と無限者の関係を思惟せずに単に生きるのではなく、関係を『結合と非結合の結合』として思惟すること
をヘーゲルに可能ならしめた鍵概念こそ、無限性の概念である。」⁵⁰ 一生とは弁証法そのものであり、精神をして弁証法的に思惟することを強いるものこそ実に生なのである。⁵¹

生と自己意識の両者はもはや両者として互いに別々の領域を保有するものではない。生と自己意識は本来いづれも無限性の概念である。厳密に言えば、生と自己意識の関係それ自身が無限性なのである。ヘーゲルが学の営みを自らの使命として引き受けることができたのは、まさにこのような生と自己意識の関係、即ち観ることの構造を無限性として理解することができるという確信を持っていたからであると思われる。

註

引用に際しては、『精神現象学』以外のヘーゲルの著作はすべてズールカンプ版ヘーゲル全集を使用し、書名の後にその巻数と頁数を記す。

(引用略号)

Phänomenologie : G. W. F. Hegel, Phänomenologie des Geistes, hrsg. v. J. Hoffmeister, 6. Aufl., 1952.

Differenzschrift : G. W. F. Hegel, Differenz des Fichteschen und Schellingschen Systems der Philosophie.
Enzyklopaedie : G. W. F. Hegel, Enzyklopaedie der philosophischen Wissenschaften.

- (1) Differenzschrift, Werke 2, S. 25.
- (2) op. cit., S. 25.
- (3) 「ヘーゲルの獨創性は、絶對的であるために自己を分割し引を裂く絶對者の神秘的なイメージにあるよりも、彼がそれに与える概念的表現のうちにある。」(Hypothese, J. Revue de Métaphysique et de Morale, 1938, P.50)
- (4) Phanomenologie, S. 88.
- (5) op. cit., S. 89. このものとして、このものとして言表せられる一切のものがこのものであり、言表せられた途端にこのものはこのものならぬもの、普遍的なこのものとなる。
- (6) ヘーゲルの例によれば、この塩の塊は白く、辛く、立方形であり、一定の比重のもの等々である。その際、物に屬性を付加することは常識の経験的な働きである。「知覚」の章の課題は、物の実體觀を打破して、もはや物に制約されぬ無制約的普遍性の地平を開示すること、また、確固とした物に関わっている自分を確固とした実在的意識と思いこんでいる常識を哲学的意識へと高めることである。
- (7) Phanomenologie, S. 100.
- (8) 或る研究者は前者がガリレイ、バークレイ、デカルトの立場であること、また後者がヒューム、カントの立場を示唆していることに注意している。 vgl. Westphal, M.: Hegels Phanomenologie der Wahrnehmung, in Materialien zu Hegels Phanomenologie des Geistes (Hrsg. V. H. F. Fulda und D. Henrich, Suhrkamp, S. 99f.
- (9) Phanomenologie, S. 97.
- (10) op. cit., S. 103. (括弧内筆者)
- (11) op. cit., S. 99. この事態は知覚的意識の弄する詭弁を通して明らかになった。
- (12) 「力の概念はむしろ自分の現実性そのものにおいて自分が実在であることを確保する。」(op. cit., S. 109)

- (13) op. cit. S. 110. 「概念は対象そのものの自己である」とも言われる (op. cit. S. 49)。
- (14) だがヘーゲルの狙いは、現象と自体的背後世界といった二世界論的図式を克服し止揚することである。「仮象の背後にあるとされる本質のうちには一種の必然的な幻想・存在論的な不幸な意識が存する」(Hypollite J., *Logique et Existence*, Presses Universitaires de France, 1953, P. 79) 「英知界の幻想は一種の必然的幻想であるが、しかし弁証法のただ一つの契機に対応するにすぎぬところが強調されねばならぬ」(Hypollite J., op. cit. P. 77)
- (15) *Phänomenologie*, S. 111.
- (16) 例えは落体の法則 ($S = \frac{1}{2}gt^2$)
- (17) op. cit. S. 114. 例えは時間と空間。両者は量的に変化するが、両者の関係は常に同一であり安定している。
- (18) op. cit. S. 111.
- (19) 両者のずれは、力の概念が自然科学的な力の法則によっては本来捉えきれないところに存する。力とは本来生きて働く無限の生の力であり、かかる力こそ哲学に固有の対象である。これに対して、数学(応用数学)の対象は空ろで死せるものである。「死せるものは自分で動くことがないので、本質の上での区別には至らず、また本質的対立や不等にも至らず、従って相対立するものの方から他方への移行には至らず、質的で内在的な運動即ち自己運動には至らぬ。まことに数学の考察する唯一のものは、量という非本質的(没概念的)区別なのである」(op. cit. S. 37f)
- (20) 「真の媒介は外的なものとの、また外的なものを介しての媒介ではなく、自分自身のうちで自己完結(beschließen)する媒介である」(Enzyklopädie, §69, Werke 8, S. 159) 推理はイデアリスムスの原理であると言われる。
- (21) *Phänomenologie*, S. 125.
- (22) op. cit. S. 124.
- (23) op. cit. S. 128. vgl. *Differenzschrift*, Werke 2, S. 25.
- (24) 「第二の超感覚的世界は転倒世界である。……(中略)……かくして内なるものは現象として完成される」(op. cit. S. 121) ヘーゲルが承認する二世界論は媒介或いは現象としての二世界論のみである。当然のことながら、ヘーゲル独自の現象概念は所謂感覚的現象とは無縁である。

- (25) op. cit. S.121.
- (26) op. cit. S. 121.
- (27) op. cit. S. 123.
- (28) この点を見落したところに、ヘーゲル哲学の通俗的解釈（所謂唯物弁証法）が生まれる。
- (29) op. cit. S. 124.
- (30) 現象と自体の二世界論的図式を克服し止揚するようにヘーゲルを強制したものは、生と生あるものどもの存在論的な関係である。
- (31) Hypothesis, J. Logique et Existence, p. 4.
- (32) Differenzschrift, Werke 2, S. 28.
- (33) Phänomenologie, S. 45.（括弧内筆者）「意識の経験の学」において経験の主体である意識は、そのつどの自分の対象に沈潜し、事柄そのものに向かうことによって、対象の何たるか（真理）を経験する。「緒論」において言われているように、意識が自分の知と自分の対象（確信と真理）に即して遂行する弁証法的運動それ自身が、意識の思惟の構造であり、「意識の経験の学」を支えているのである。
- (34) Hegel, Wissenschaft der Logik, Werke 5, S. 74.
- (35) Phänomenologie, S. 126.
- (36) Differenzschrift, Werke 2, S. 25.
- (37) 例えば自我と欲望、人間が相互に承認をうるための生死を賭けた戦い、主人と奴隷の支配隷属関係の逆転、思惟におけるストア主義者の自由、そして無限者を目差しての不幸な意識の苦悶。
- (38) 「汝自身を知れ、という絶対的命令は、……（中略）……人間そのものにおける真なるもの、即ちそれ自体において真なるもの認識、言いかえると精神としての本質そのもの認識という意味をもつ。……（中略）……人間知は、普遍的なもの、人間そのものの認識、従って本質的に精神の認識を前提としてのみ意味をまよひする。」（Enzyklopädie, §377, Werke 10, S.9）
- (39) Phänomenologie, S.136.
- (40) op. cit. S. 125.

- (41) vgl. Enzyklopädie, §§350–376, Werke 9, SS. 430–530.
- (42) Phänomenologie, S. 138.
- (43) op. cit., S. 135.
- (44) op. cit., S. 138.
- (45) Enzyklopädie, §368, Werke 9, S. 501.
- (46) 「生の直接的な理念はその真理へ、自分自身へと到達し、自由な自覚的類として出現する。直接的であるにすぎない個別的生命体の死は即ち精神の顕現である」と言われる (Enzyklopädie, §222)。此处にヘーゲルは動物的有機体の自然的な類性から人間の精神的な類性への移行を見ているようである。しかし、生の即自的な或いは自然的な類から自己意識の対自的な或いは精神的な類への深化（移行とまでは言わないにしても）に、一体どれ程の意味があるのだろうか。
- (47) Hegel, Der Geist des Christentums und sein Schicksal, Werke 1, S. 370.
- (48) 「神的美在の人間化 (Menschwerdung) / 即ち神的美在が本質的直接的に自己意識の形態をとること、それが絶対宗教の単純な内容である」 (Phänomenologie, S. 528)
- (49) Hegel, Systemfragment von 1800, Werke 1, S. 421.
- (50) Hypopolite, J., Revue de Métaphysique et de Morale, 1938, P. 50.
- (51) Hypopolite, J., op. cit., P. 48.

(本学大学院博士課程・西洋哲学史)